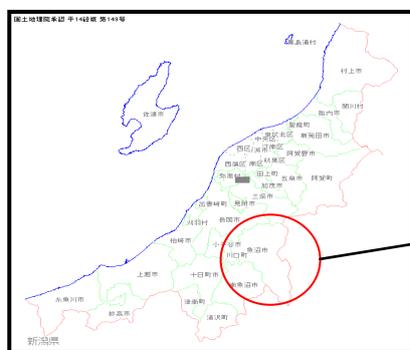


モデル事業名	限界集落の埋もれた資源の再利用による地域の活性化
活動団体名	特定非営利活動法人 野外教育学修センター 魚沼伝習館
ホームページ	http://www.uonuma-denshukan.com
所属／ 担当者名	雛田 真彰
連絡先	TEL/FAX 025-777-5042 E-mail info@uonuma-denshukan.com
活動地域	新潟県魚沼市福山新田地区

● 活動地域の概要

- ・集落人口 H14年233人→H20年183人
- ・世帯数 H14年85戸→H20年75戸
- ・平成15年 福山小学校廃校

【位置図】新潟県魚沼市福山新田



耕作放棄された田んぼ



廃校になった小学校

● 活動地域の課題

当該地域は、少子高齢化と豪雪地として市内でも孤立した場所にあることなどから若者の離村が進み、その結果、平成15年に福山小学校が廃校となり、集落経済の中心である農業の担い手も減少し、耕作放棄地が増加の一途をたどることとなった。また、森林についても住民の山離れが進むことで森が荒廃している。

そこで、平成20年度「新たな公」事業で地域資源の再利用を目的に行った、新たな農林業体験の場としての耕作放棄地の回復や、集落の大部分を占める山林の境界調査と部分的な山林整備を住民と協働で行ったことで集落との連携体制が構築され、住民の意識にも変化が見られてきた。しかし、限界化集落では農業の担い手育成、森林整備・保全について持続可能な仕組みづくりを構築することが大きな課題として残った。

● 活動の内容

- ・平成20年度

- ①耕作放棄地の回復
- ②山林の調査及び環境整備

- ・平成21年度

- ①里山の林道整備
- ②里山の整備と収入の場づくりの検証
- ③情操教育の場としての当該地の利用

● 活動の成果

・平成20年度

- ①地域住民の意識が活性化に対してあきらめの気持ちが強く余計なエネルギーは使いたくないというスタンスであったが地域の有効性と可能性を粘り強く話し合いすることで意識が変わったことが最も大きな成果と考えられる。
- ②この事業に際して、地域全体が行政との距離が非常に近く我々NPOだけでは十分な説得はできなかった点を、自治体である魚沼市の担当部署が積極的に関わってくれたことが合意形成を早め、地域も正しい理解してくれたと思う。
- ③資源の発掘については、当初対象物件（田んぼ）を定めていたが、その対象が現状では利活用困難であることが判明し調査範囲を広げたことで潜在的資源の規模の大きさを改めて確認することとなった。
- ④資源の利活用調査についても、地域住民、関係団体と共に実地踏査を行ったことで当初予想していなかった資源の利活用の可能性まで確認できた。
- ⑤この地域には既に首都圏より田舎暮らし体験でリピーターとして来ており、今回の調査の状況等も説明したところ活動に積極的に参加をしたいとの声もあり活動の輪が広がることが期待できる



耕作放棄された田んぼ



整地し耕作可能となった田んぼ

・平成21年度

①里山の林道整備

- ・昨年に引き続き、地元住民と協働で毎月1回林道の特定・下草刈りを行った。
- ・地域資源の豊さが再認識され、里山保全へ対する意識が高まり積極的に参加するようになった。
- ・地域資源の利活用に対して、住民からは具体的な活用案は出てこないが協働体制は構築されつつある。

②里山の整備と収入の場づくりの検証

- ・昨年回復させた田んぼ（40a）で耕作をはじめ。
- ・森林整備や農作業体験を目的とした「フォレストクラブ」を立ち上げ、毎月1回活動を行う。
- ・収入の場づくりを目的とした「農林で考える田舎暮らし研究会」を立ち上げ、収入源となりうる新商品開発（苔玉、ネイチャークラフト）等を行う。
- ・少数ではあるが都会からのリピーターが当該地に関心を寄せ、移住希望者がでてきた。（新たにH22年3月に1名移住予定）
- ・地域資源を利活用した商品開発に地元住民が積極的に参加するようになった。

③情操教育の場としての利用

- ・林道の整備によって自然観察やキノコ狩り、クラフト材料集めなどプログラムの幅が広がった。
- ・親子で除間伐や炭焼体験などを行うことで、森林に対する興味関心が強くなり地域資源の再発見につながった。



地域住民との林道調査



農作業体験イベント



親子の除間伐体験

● 今後の課題及び展望

・課題

現在のところ参加人数が少なく参加者を増やす方策や活動日が固定され天候によっては中止となるため、雨天プログラムの充実・日程の変更等、運営体制に課題が残る。また、持続可能な森林整備を行ううえで常時ボランティアを募るなど日常の作業に安定した人員を確保する必要がある。

・展望

今後は日常の作業ボランティアの募集や魅力ある体験イベントの企画内容を検討していき、当該地にまずは人が集まる仕組みを構築していくことで活動の幅は広がっていくものとする。また、「農林で考える研究会」を柱に地域資源の発掘を続け、安定した収入の場づくりを行うことで地域経済の活性化を図れると考える。

